

考察 1

中世・吉野川下流域における土師質土器碗の流通

—— 吉備系土師器碗に注目して ——

1 はじめに

吉野川下流域に立地する中島田遺跡の溝・土坑などから土師質土器碗がまとまって出土している。当遺跡出土の碗形態は、土師質土器碗・瓦器碗・国内産陶器碗・輸入陶磁器碗に分類されるが、このうち最も多く出土するのは土師質の碗である。これらの碗は、灰白色あるいは淡黄褐色系の色調を呈し、精良な胎土をもつ、いわゆる「吉備系土師器碗」と称されるもので、形態・法量から14世紀前半に位置づけられる。

従来「早島式土器」と呼称されていた吉備系土師器碗は、岡山県および広島県東部（備前・備中・備後）の中部瀬戸内北岸部を中心に分布し、その出現・消滅時期は畿内産の瓦器碗とほぼ同時期とされる。近年の吉備系土師器碗についての研究は、鈴木康之⁽¹⁾・武田恭彰⁽²⁾・橋本久和⁽³⁾・山本悦世⁽⁴⁾各氏によって、編年・製作技法・地域性さらに用途論など多角的に研究が進められ、同碗に関する研究は大きな深まりを見せている。特に、橋本氏による詳細な出土分布の検証、山本氏による岡山市鹿田遺跡出土の新たな資料に基づいた類型・編年研究、そして鈴木氏による「まじないの土器」としての用途論など、注目すべき成果が発表されている。

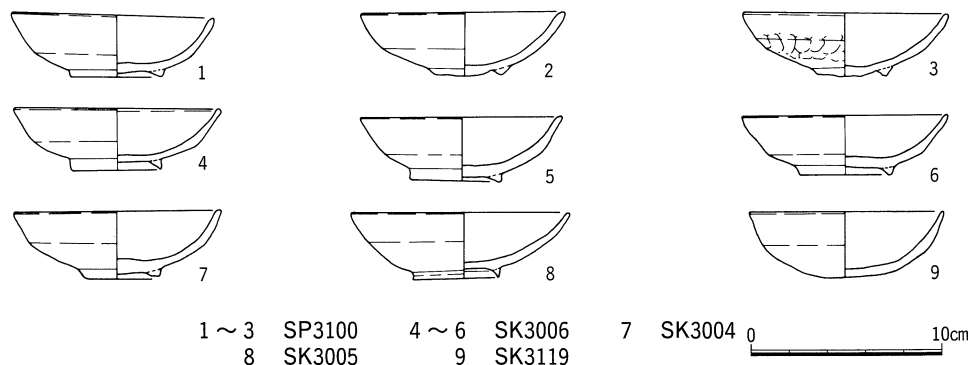
本稿では、これらの諸成果によりつつ、主に同碗の流通に関わる問題を当遺跡出土資料をもとに考えてみたい。このことは、当遺跡の性格ならびに吉野川下流域における中世集落の土器流通の様相を考察することにもつながると思われる。

2 中島田遺跡出土の吉備系土師器碗

第247図は、当遺跡出土の吉備系土師器碗で、いずれも遺構から出土したものである。同碗は、溝・土坑などから多量に出土しているが、ここでは法量の正確な数値を得るため完形品を抽出し、あわせて一括性の高いものを中心に取り上げた。以下、その形態・技法・法量を検討・整理してみたい。

1・2・3は建物を構成する柱穴（SP3100）出土の碗で、地鎮に伴う極めて一括性の高い資料である。1・3は口縁部がやや外反気味で、口縁部外面に強い横ナデが施され、体部との境に明瞭な稜がつく。また体部下位にはユビオサエの跡が見られる。1は断面逆三角形の高台が、3は逆台形状の高台が貼り付けられるが、3の高台径は極端に小さい。2は全体にややいびつな形態で、口縁部はわずかに内湾する。全体につくりが粗雑で、底部が尖り気味であるため安定さを欠く。底部には退化した高台が貼り付けられるが、つくりが極めて雑で、全周していない。

4・5・6はSK3006出土資料である。4・5は口縁部がやや外反するが、6はわずかに内湾する。いずれも口縁部外面に横ナデが施され、4・5は体部との境に明瞭な稜がつく。4は内面に横ナデが施され、板状工具の痕跡が見られる。高台は断面逆三角形であるが、4・6の高台はいびつなかたちとなっている。SK3004出土の7は他の碗に比べ体部の器壁が厚く、全体に粗雑なつくりで、退化した高台はいびつなかたちとなっている。SK3005出土の8は口縁部が内湾気味で、外面に横ナデが施されるが、体部



第247図 中島田遺跡出土吉備系土師器碗

との境の稜は明瞭でない。断面逆三角形の高台が貼り付けられる。9は高台の付かない丸底の碗である。口縁部はやや内湾気味で、口縁部外面に横ナデが施され、体部外面下位にユビオサエの跡が見られる。草戸千軒町遺跡では、無高台の土師質碗は高台付の碗Bと区別して碗Aとして分類されている⁽⁵⁾。色調は、3が淡黄褐色、9が黄褐色で、他は灰白色を呈する。また胎土は、砂粒を幾分含むが、おおむね精良で、全体に硬質感が保たれている⁽⁶⁾。

次に、法量について整理してみると、1～8の口径は8の11.3cmを最大値として10.4～11.3cm、器高については、3.2～3.5cmで、平均値は口径10.74cm、器高3.31cmとなる。なお、無高台の9は口径10.2～10.5cm、器高3.5cmを測る。このように第247図に掲載した当遺跡出土の吉備系土師器碗は、総じて口径・器高ともに狭小であると捉えられるが、これら数値を山本作成の吉備系土師器碗類型表に当てはめてみると、鹿田遺跡編年のⅢ－3期C 3類が口径10.7～11.6cm（平均値11.11cm）、器高3.0～3.5cm（同3.3cm）の範囲に設定されていることから⁽⁷⁾、中島田遺跡出土の同碗はほぼこれに相当すると言える。従って、当遺跡のこれらの碗は年代的には14世紀前半に比定され、吉備系土師器碗のほぼ終末段階のものと位置づけられる。

なお、当遺跡から出土する吉備系土師器碗の全体的な法量分布は第247図の資料のそれと近似した数値を示しており、時期的にはほぼ上記年代に収まると考えられる。

3 吉備系土師器碗の出土分布と流通

吉備系土師器碗の出土地については、山本悦世・橋本久和両氏の論稿に詳細に取り上げられているが⁽⁸⁾、それによると同碗は、岡山県および広島県東部（備前・備中・備後）の中部瀬戸内北岸部を中心に、東は淀川水系周辺地・京都・鎌倉、西は博多、さらに当遺跡を含む四国地方にその出土が見られ、出土分布はかなり広い範囲にわたっている。そこで、ここでは吉備系土師器碗の生産地およびその周辺地である吉備地域（備前・備中・備後）と生産地以外の地域に大別して出土分布の状況をまとめてみたい。また、同碗の出土する各遺跡には一定の立地上の特質が認められることから、出土地および出土分布から見た吉備系土師器碗の流通の様相についても併せて考察してみたい。

(1) 生産地およびその周辺（吉備地域）

吉備地域における吉備系土師器碗の出土分布は、前述のように山本・橋本両氏の論稿に詳しいが、代

表的な出土地として、備前では岡山市鹿田遺跡・百間川遺跡群（当麻・長谷各遺跡）・邑久町助三畑遺跡などが、また備中では総社市のこうもり塚古墳・下三輪遺跡・備中国府跡遺跡・清水角遺跡などが挙げられる。さらに備後では、福山市草戸千軒町遺跡・尾道市街地遺跡などが知られている。

出土分布は、橋本氏が指摘するように東は備前の吉井川流域から西は備後の芦田川流域にかけての主に瀬戸内海沿岸部に密に分布しているが⁽⁹⁾、特に、備前・備後地域では、河川下流域の沖積地での出土が顕著である。出土量は、各遺跡に差はあるものの一定量出土している。今後、この地域における出土例は、さらに増加するものと予測される。なお、現時点では吉備系土師器碗の焼成窯はまだ確認されるに至っていない。

(2) 生産地以外出土分布

a 畿内地域

畿内では、淀川河口部に近い尼崎市辰巳橋遺跡をはじめ、淀川河床遺跡に属する守口市八雲遺跡・寝屋川市仁和寺遺跡・高槻市大塚遺跡・同柱本遺跡、さらに八幡市木津川河床遺跡などの淀川・木津川水系に立地する集落跡等から吉備系土師器碗が出土している⁽¹⁰⁾。また、京都市内では、平安京左京六条三坊や京都大学病院構内からも同碗が出土しており、ともに14世紀前半に属するものとされている⁽¹¹⁾。これらの遺跡は、いずれも京都と西日本各地を結ぶ国内流通上の大動脈である瀬戸内水運ルート上に立地しており、瀬戸内水運を通して同碗が搬入されたものと思われる。

b 四国地域

四国では、讃岐と阿波で吉備系土師器碗の出土が見られる。讃岐における同碗の出土遺跡については、片桐孝浩氏の研究に詳しい⁽¹²⁾。それによると、讃岐において同碗が出土している遺跡は、島嶼部も含めて12遺跡で確認されている。出土分布は、西讃地域から中讃地域にかけて特に集中しているが、時期的には、13世紀後半～14世紀前半の資料が中心である。

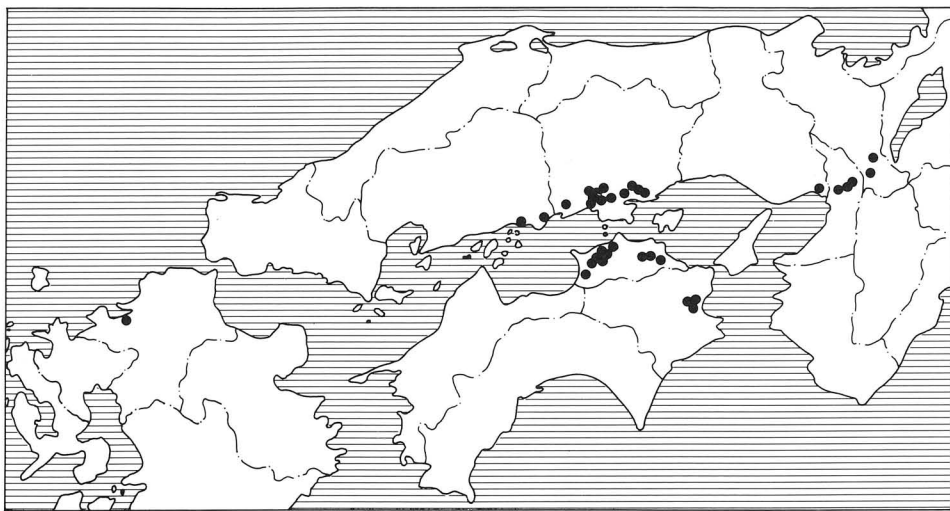
このうち、同碗がまとまって出土しているのは、坂出市下川津遺跡および豊中町延命遺跡である。下川津遺跡では、第4低地帯流路4・5・6などから出土しており、特に流路6からは多量に出土している⁽¹³⁾。これらの碗は、年代的に12～13世紀代に属するが、とりわけ12世紀後半～13世紀前半に集中している。また延命遺跡では、八反地地区SD47・SK18を中心に一定量出土しており⁽¹⁴⁾、それら資料は13世紀後半に位置づけられる。下川津遺跡は、丸亀平野東端部の大東川下流域の沖積地に立地しており、同川河口部を介して瀬戸内海に通じている。また延命遺跡は、三豊平野北西部に位置し、財田川下流域右岸の沖積地に立地している。

次に、阿波では、徳島市中島田遺跡・南島田遺跡・名東遺跡の3遺跡からそれぞれ出土している。中島田遺跡では前述したように14世紀前半の碗が多量に見られる。南島田遺跡では、土坑・自然流路および包含層から比較的まとまって出土しており⁽¹⁵⁾、時期的には中島田遺跡の碗とほぼ同時期のものと思われる。また名東遺跡においては、井戸・柱穴から少量ではあるが、出土している⁽¹⁶⁾。名東遺跡の碗は、いずれも内面にミガキが施されず、高台がかなり退化していることから、やはり中島田遺跡の碗と同様、14世紀前半頃に位置づけられる。中島田・南島田・名東の3遺跡はいずれも鮎喰川下流域右岸の沖積地に立地し、南島田遺跡は中島田遺跡の西側に、また名東遺跡は、中島田遺跡の南西方向約2kmを隔てた所に位置している。

c その他の地域

上記以外の地域では、博多と鎌倉で出土している⁽¹⁷⁾。博多・鎌倉はともに中世を代表する都市であるが、橋本氏によると、吉備系土師器碗の出土量は極めて少なく、時期的には13～14世紀代に属するものと報告している⁽¹⁸⁾。このうち鎌倉出土の同碗については、河野眞知郎氏も検討を加えており、13世紀後葉～14世紀中葉の年代観が与えられている⁽¹⁹⁾。

以上、吉備系土師器碗の出土遺跡を吉備地域とそれ以外の地域に分けて述べてきた。そして、それら遺跡を地図中に示したものが第248図である。これには、吉備系土師器碗の出土遺跡がすべて網羅されているとはいえないが、これによって同碗の出土分布をおおよそ把握することができる。



第248図 吉備系土師器碗の出土分布

(3) 吉備系土師器碗の流通

吉備系土師器碗が最も集中して出土する地域は、生産地である吉備地域、わけても備前・備中である。出土遺跡は多数に上り、分布密度もかなり高い。ただし、当該地域にあっても瀬戸内沿岸部に顕著であり、内陸部においては出土しておらず、ここに吉備系土師器碗の流通上の特質が認められる。

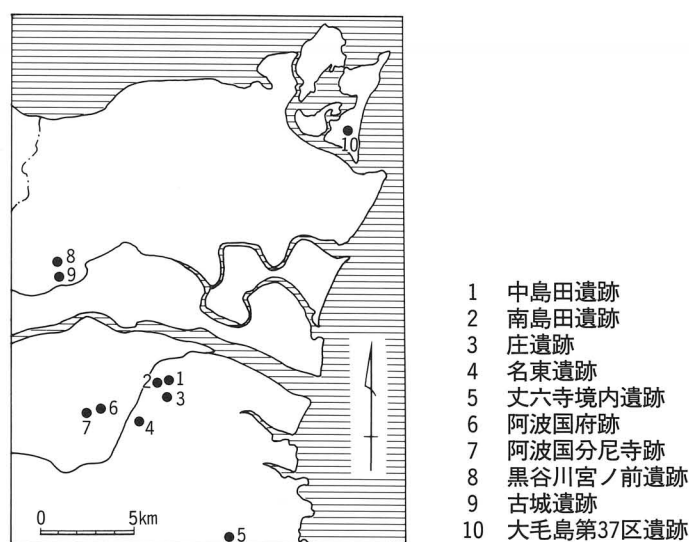
次に注目されるのは、淀川・木津川流域である。これについて、淀川・木津川河床の採集資料を整理・検討した中世土器研究会は、これら採集資料の中に13世紀代の吉備系土師器碗が多数含まれており、11～14世紀の碗形態のなかで、吉備系をはじめ防長系・讃岐系の土師器碗が全体の10%近くを占めていると報告している⁽²⁰⁾。しかしながら、同碗が他の畿内の一般的な遺跡からほとんど出土していないところから、橋本氏は淀川流域や京都周辺に同碗の分布が拡大することはないと指摘した上で、水上交通との関わりから別の諸物資に付属して吉備系土師器碗が当該地域に搬入されたと捉えている⁽²¹⁾。さらに同氏は、博多・鎌倉の場合においても同様な捉え方をしている。

ところで、讃岐・阿波の前記遺跡からは、吉備系土師器碗がまとまって出土しており、その点で淀川・木津川流域における出土状況とは異なった様相を示している。これについて橋本氏は、讃岐・阿波に搬入された吉備系土師器碗に商品としての性格を認め、同碗の出土する遺跡が物資の集散地としての性格をもつものであったと述べている⁽²²⁾。中島田遺跡をはじめ下川津・延命各遺跡の立地上の特質を考える

ならば、橋本氏の捉え方は首肯されよう。

以上のことから、吉備系土師器碗は比較的広い範囲の出土分布を示すとはいえ、商品としての流通範囲は、吉備地域を除くとかなり限定されており、しかもその流通に当たっては受容側の遺跡の特質（立地・性格など）に大きく規定されたものと捉えられる。この点で、西日本の各遺跡で出土する畿内産瓦器碗の流通形態とは異なっている。

4 吉野川下流域における吉備系土師器碗の流通



第249図 吉野川下流域における畿内産（和泉型）瓦器碗の出土遺跡

阿波における吉備系土師器碗の出土遺跡は、現在のところ、吉野川下流域に位置する鮎喰川下流域右岸の中島田・南島田・名東3遺跡のみで、周辺の他の遺跡では出土していない。例えば、吉野川下流域左岸に位置する中世の大規模集落跡である板野町黒谷川宮ノ前遺跡は、吉備系土師器碗が生産された期間と年代的に重複するが、そこでは畿内産瓦器碗（和泉型）の出土が見られるものの、吉備系土師器碗の出土は見られない⁽²³⁾。従って、現時点では、吉備系土師器碗の阿波における流通はかなり狭い範囲となり、それは鮎喰川下

流域右岸の地域に限定されることになる。

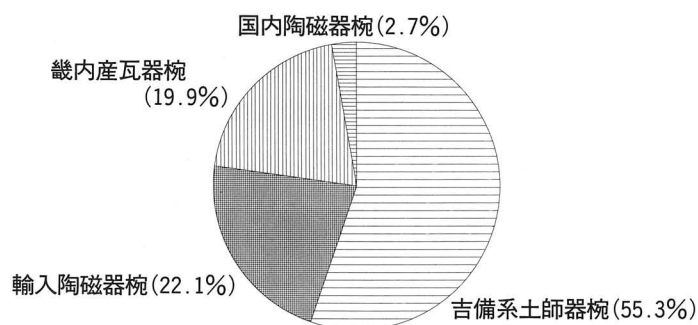
第249図は、吉野川下流域における畿内産（和泉型）瓦器碗の出土遺跡を示したものである⁽²⁴⁾。この地域における畿内産瓦器碗は、10遺跡で確認されており、当地域の中世集落跡ではかなり普遍的に出土する。このことから、その出現・消滅時期においてはほぼ併行する畿内産瓦器碗と吉備系土師器碗の流通範囲は、大きく異なることが分かる。すなわち、畿内産瓦器碗が吉野川下流域の広い範囲で多く出土するのに対し、吉備系土師器碗の出土は、鮎喰川下流域右岸の地域に限られている。

そこで、中島田遺跡出土の碗形態を整理・分析して、鮎喰川下流域における吉備系土師器碗の流通の様相を考察してみたい。

当遺跡出土の碗形態は、土師質土器碗・畿内産瓦器碗・国内産陶器碗・輸入陶磁器碗に分類される。表2は、当遺跡の遺構・包含層から出土した碗類（総数331点）を上記分類に従って整理したものである⁽²⁵⁾。また、第250図は表2の数値をグラフ化したものである。なお、碗形態に含まれる木地・漆器碗については、少数出土しているが、性格上遺存しにくいことから、検討の対象から除外している。

	遺 構	包含層	小 計
吉備系土師器碗	104	79	183
輸入陶磁器碗	29	44	73
畿内産瓦器碗	42	24	66
国内産陶器碗	6	3	9
計	181	150	331

※ 数字は個体数を示す



第2表 中島田遺跡出土碗形態の分類(1)

第250図 中島田遺跡出土碗形態の分類 (2)

これによると、碗形態で最も高い比率を示すのは土師質の碗である。総数331点のうち183点を数え、全体の55.3%を占める。この土師質土器碗はすべて吉備系土師器碗である。これについて多いのは輸入陶磁器碗で、全体の22.1%を占める。特に龍泉窯系青磁碗が量的に圧倒しており、輸入陶磁器碗の91.8%がこれである。さらに畿内産瓦器碗も高い比率を示し、全体の19.9%を占める(個体数66点)。この瓦器碗はすべて和泉型瓦器碗で、そのほとんどは森島編年のⅣ－3・4(13世紀末葉～14世紀前半)に属するものである⁽²⁶⁾。このように当遺跡では、吉備系土師器碗・輸入陶磁器碗・畿内産瓦器碗が碗形態の97.3%を占める。それ以外では国内産陶器碗が見られるが(備前窯・瀬戸窯)、その比率はかなり低く、全体のわずか2.7%にすぎない。この陶器碗のうち備前窯の碗が量的には多く(5個体)、陶器碗の55.6%を占める。

以上のことから、当遺跡における碗形態は、吉備系土師器碗をはじめ輸入陶磁器碗・畿内産瓦器碗など、すべて搬入品によって構成されていることが理解できる。当遺跡を含む吉野川下流域における中世遺跡の土器様相として、搬入品の優位性が指摘されているが⁽²⁷⁾、このことは特に、碗形態において顕著である。そのなかでも、特に吉備系土師器碗の碗形態に占める比重は極めて高いものがあり、流通の観点からも注目される。

そこで、最後に当遺跡に多量の吉備系土師器碗が搬入された要因を前述した他地域の同碗出土遺跡の立地・性格等から考えてみたい。吉備系土師器碗が出土する遺跡は、出土遺跡を見る限り、福山市草戸千軒町遺跡・坂出市下川津遺跡などに見られるように河川下流域の沖積地に立地し、水運と結びついた物資流通の集散地としての性格をもつ遺跡に顕著である。この点からするならば、中島田遺跡もこのような特質を備えた遺跡と捉えられ、そのことが当遺跡に多量の吉備系土師器碗が搬入された大きな要因と考えられるのである。

5 おわりに

これまで、吉野川下流域に位置する中島田遺跡出土の吉備系土師器碗に注目して、同碗の全国的な出土分布ならびにその流通の様相を先行研究に依拠して検討してきた。現在のところ、吉備系土師器碗の出土する遺跡は、吉備地域および讃岐を除くとそう多くはなく、しかも、一定量まとまって出土する遺跡はかなり少ない。

そのようななかで、当遺跡は吉備系土師器碗が多量に出土する数少ない遺跡の1つであり、同碗の流通を考えていく上で、貴重な資料を提供する。吉備系土師器碗の出土遺跡は、河川下流域に立地し、水

運と結びついた物資流通の集散地としての遺跡に顕著に見られることは、中島田遺跡がそのような性格をもつ遺跡であることを示すことにほかならない。その意味で、当遺跡に見られる集落は、吉野川下流域において流通上大きな位置を占めていたものと思われ、吉備系土師器碗をはじめとする搬入品は、中世の当該地域における流通の様相を具体的に示す資料となる。

注

- (1) a 鈴木康之「土師質土器の用途に関する研究ノート(1)」『草戸千軒』No. 197 広島県草戸千軒町調査研究所 1989
- b 同「土師質土器の用途に関する研究ノート(2)」『草戸千軒』No. 198 広島県草戸千軒町調査研究所 1989
- c 同「土師質土器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 真陽社 1995
- (2) 武田恭彰「吉備系土師器碗の製作技法について」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』 中世土器研究会 1991
- (3) 橋本久和「瀬戸内の中世土器」同氏著『中世土器研究序論』 真陽社 1992
- (4) a 山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』 中世土器研究会 1992
- b 同「吉備系土師器碗の成立と展開」『岡山大学構内発掘調査報告 第6冊 鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993
- (5) 鈴木康之「土師質土器の変遷過程」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994
- (6) 碗の色調・胎土には若干の個体差が認められるが、現時点ではそれらを分類するまでにはいたらない。
- (7) 山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」注(4) b
- (8) 注(3)(4)に同じ
- (9) 注(3)に同じ
- (10) 注(3)および橋本「河床遺跡と中世考古学」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』 中世土器研究会 1993
- (11) 注(3)に同じ
- (12) 片桐孝浩「讃岐における中世前半の供膳具(Ⅰ)」『研究紀要Ⅱ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1994
- (13) 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会 1990
- (14) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第8冊 延命遺跡』香川県教育委員会 1990
- (15) 『中島田遺跡・南島田遺跡』徳島県教育委員会 1989
- (16) 『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要2』徳島市教育委員会 1992
- (17) 大庭康時「日本各地から運ばれてきたやきもの」川添昭二編『よみがえる中世1—東アジアの国際都市博多』平凡社 1988
- 河野眞知郎「鎌倉の搬入土器と在地土器」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』 中世土器研究会 1992
- (18) 注(3)に同じ
- (19) 注(17)に同じ
- (20) 河上誓作・中世土器研究会「淀川・木津川河床の採集資料」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』 中世土器研究会 1993
- (21) 注(3)・(10)に同じ

- (22) 注(3)に同じ
- (23) 『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 2』同センター 1991
- (24) 久保脇美朗「阿波における瓦器の出土状況」(第4回四国中近世土器研究会報告資料)1992および橋本久和「瓦器碗の分布」『中世土器研究序論』(注(3))より作成
- (25) 本報告書に掲載した各遺構・包含層出土の碗類を対象に数量分析している。従って、当遺跡出土の碗類すべてを網羅しているものでないが、碗形態の構成はこれによってほぼ把握されるものと考えられる。
- (26) 森島康雄「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会 1992
- (27) 勝浦康守「各地の土器様相—四国・阿波」『概説 中世の土器・陶磁器』注(1)c

(山下 知之)